

浄土

monthly JODO

2020
January

1

法然上人鑽仰会

貧乏骨董

三宅政吉

グラフィック・デザイナー

妙見星神



このお札を手に入れたのは五年ほど前だったか。東京は江東区の富岡八幡宮の骨董市で、うず高く積み重ねた古紙の中から見つけ出した。摺りものではない。筆で描かれたものである。

店主にこれはどこから出たものだろうと尋ねたが「ちよつとわからないね、いつごろのものかもわからない、そこそこ古いようだけど」とのことだった。古紙など適当に古いものをかき集めて売っただけであるから、いちいち調べていたのでは商売にならないのだろう。しかし、買う方はそうはいかない。なにか手がかりを掴みたいから、店主に聞いてみるのである。

描かれているのは玄武（亀と蛇が合体した想像上の動物で北方の守り神。一九七二年に発見された奈良県高松塚古墳の北壁に描かれていた四神のひとつとして

上：左右178mm 天地275mmのお札。左は季刊『銀花』36号（文化出版局／1978年）に掲載された妙見星神の版画



よく知られている」と、その上に乗る妙見星神（妙見菩薩）、頭上には北斗七星が描かれている。その上に位置するのはオリオンの三ツ星だろうか。

妙見信仰はインドに発祥した菩薩信仰が、中国で道教の北極星・北斗七星信仰と習合し、仏教の天部（インドの古来の神が仏教に取り入れられて護法神となったもの）のひとつとして日本に伝来したものである。七世紀（飛鳥時代）のことで、高句麗・百済出身の渡来人によってもたらされたものと考えられる。

上記が妙見信仰についてのおおよその知識であるが、これだけではこのお札の出自はわからない。こちらの無教養もあってそれ以上の追及は諦め、ときどき取り出して眺めたりしていた。柔らかな線で描かれた妙見菩薩は優しい表情を浮かべている。玄武の顔もどこかユーモラスである。妙見菩薩の画像をインターネットで検索すると、この絵のように優しい表情をしたものから、剣を振りかざし、憤怒の表情の像まで様々な姿をした妙見菩薩の像客があることがわかる。

雑誌『銀花』のバックナンバーを見ていてこの絵とは同じ版画を見つけた。妙見星神と書かれた北斗七星を挟んだ反対側に秩父神社とある。妙見星神の表情はやや硬いが、描かれた内容は同じである。これをひとつの手がかりとして、埼玉県秩父神社を訪ねてみることにした。それについては次号に書いてみる。

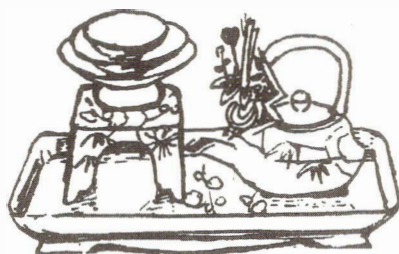
浄土

2020/1月号 目次

なぜいま法然上人鑽仰か	佐藤良純	2
釈尊より法然へ●	頼住光子	4
法然上人と親鸞聖人②⑧	林田康順	10
連載 微風吹動	工藤量導	16
連載 江戸の川を歩く③④	森 清鑑	20
連載小説 渡辺海旭⑩③	前田和男	26
連載 マンガ さっちゃんはネッ	かまちよしろう	35
編集後記		36

表2 貧乏骨董

三宅政吉



表紙題字＝中村康隆元浄土門主

表紙写真＝鬼海弘雄

アートディレクション＝近藤十四郎

協力＝迦陵頻伽舎

なぜいま 法然上人鑽仰か

会
佐藤良純

法然上人鑽仰会が浄土宗の有志を結集して発足したのは、昭和九年（一九三五）のことであつた。翌十年四月十二日に正式の発会が認められ、浄土宗報（第二百十二号）にその旨が掲載された。同年、法然上人鑽仰の運動を実りあるものとするため、雑誌『浄土』が創刊され、五月には第一号が発行された。以後、戦乱による休刊を経て、昭和二十一年三月に復刊、令和二年一月には、通巻第九四〇号が発行される。八十余年に渉る長い道のりであつた。昭和九年という年は、友松圓諦師が「法句経講義」を著し、「全日本真理運動」を展開し、山崎弁栄上人の「光明会」も活発な運動を行った時期である。友松師のラジオを通じての「法句経講義」は、新しい試みとして、広く注目を集めたのである。『浄土』には、法然上人の教えのみならず、多方面に渉る論考が掲載された、また中村弁康師の「信仰相談」には、当時の人々の悩み、苦しみ、悲しみからの救いを求める声がよせられ、心

のこもつた説得力のある回答とともに大きな反響をよんでいた。

時は移つて世は令和の年、日本は第二次世界大戦という未曾有の危機をなんとか乗り切つたが、日本人の精神的バックボーンとなる宗教、倫理、道徳の基盤は全く変わつてしまつたといわざるを得ない。昨今の物質文明の進歩発展は目を見るものがある。日常生活は豊かになつたが、人の心はそれに反比例し、貧しくなつてしまつたような気がする。

法然上人も鎌倉時代、世情騒然とした中であつて、貴族、武士、市井の民衆など、あらゆる人々に救いをもたらす教えを求め、八万四千といわれる仏教の法門の中から、「念仏の教え」を選びとり、「ただ往生極楽のためには、南無阿弥陀仏と申して、疑いなく往生するぞと思ひ取りて申す外には、別の仔細候わず」と説かれた。この数行に、我々は、法然上人のひたむきな信仰を強く感じとることができる。

残念ながら「往生」の言葉は、今では「行き詰まつた」、「亡くなつた」の意味に使われることが多いが、元来ここには「死ぬこと」の概念はない。江戸時代の名僧、徳本上人は、「往生という字は、死ぬるという字に書きはせぬ。行き生まると書くぞよ。この通りに心得て、精出して念仏申さつしやるがよい。さっぱりと死ぬるのじゃないぞよ。極楽へ生まれるのじゃ。」と実に明快にその意味を説いている。

すべての衆をお救いくださる阿弥陀仏を信じ、南無阿弥陀仏と称えることにより、この世は安穩に、命終わつてからは極楽浄土に往きて生れる教えを示してくださつた法然上人に、我々はあらためて、鑽仰の心をささげたいと願う。

釈尊より 法然へ

大乘仏教における浄土宗

法然上人鑽仰会 講演概録

5

東京大学教授

頼住光子

念仏の徳としての感應道交

『選択集』の第16章の最後の部分で、「まさに知るべし。浄土の教、時機を叩いて行運に当り、念仏の行、水月を感じて昇降を得たり」という言葉がございませう。水月というのは、阿弥陀仏を月に、衆生を水にたとえ、月と水というのは非常に遠く離れているのだけれども、しかし、月が水に映り、水と月とが相即不離、お互いに一体となっているように、念仏を称えることによって阿弥陀仏と衆生とが感應道交し通じ合うということを、法然上人は強調していくわけです。

また、『選択集』の第2章の中にも、『観経疏』を引用いたしまして、「衆生を行を起こして、口に常に仏を称すれば、仏すなわちこれを聞こしめす。身に常に仏を礼敬すれば、仏すなわちこれを見たまう。心に常に仏を念ずれば、仏すなわちこれを知りたまう。衆生仏を憶念すれば仏もまた衆生を憶念したまう。彼此の三業相い捨離せず。故に親縁となづくるなり」という言葉がございませう。ここでは、自己が仏を見て、仏が念仏者を見るということを言っているわけです。これは二種深信からも解釈できます。仏の視点から自己を見直すことで念仏者は自己を反省して——これが機の深信ということだと思ひますが、その反省に基づいて仏へと心を向ける——法の深信ということです。さらに念仏における衆生と仏の一体性とも解釈できます。

このような念仏における仏と念仏者との通じ合いこそが、法然上人の目指したものでなかったらうかと思ひます。要するに、仏と自分とが、水に月が映るように一つとなっている。仏と自分とが不離一体、仏と自分とが一如になっていく、こういう自他一如の世

界というのが、大乘仏教のまさに空―縁起の世界であり、それを法然上人は目指している。その一つの非常に美しい例えとして水月の例えということが言われているのではないかと思います。

浄土往生

次に、浄土往生を考えてみましょう。浄土について法然上人は、阿弥陀仏が法蔵菩薩であつたときに建立したと捉えております。そして、本願によつて念仏すれば浄土に往生できると言っています。その浄土は報土であつて、九品の区別というのはいわば方便であつて、浄土に悪人が往生する浄土、善人が往生する浄土の区別はないと言っています。

さらに、往生に関して俱会一処ということが言われています。法然上人はこれについて『阿弥陀経釈』の中で、「生生世世の父母師長妻子眷属朋友知識に相い見えんとおもはば、極樂世界に往生すべきなり」と言っているわけです。これはどういうことかとすると、この世に限定された父母等ではなくて、無限の過去からの父母に会えるのが極樂世界だということです。要するに、自分と関係している無限に多くの人たちに会えるというのは、まさにこれは空への接近と捉えられる。空というのは、自他一如、あらゆるものがあらゆるものとつながり合つて、働き合っていることです。極樂浄土において自分の関係した人々と無限につながり合えるということは、まさにそこにおいて空―縁起を体得するということなのではないかと思われます。

表現方法としては、法然上人は浄土については、有相、指方立相ということ、形があるものとして捉えていくのですが、これは、衆生に対して教え導くときに有相を重視して

いるからです。大乘仏教者としては当然、先ほど申し上げました空—縁起や無相などを射程におさめつつも、菩薩として人々を導くときには有相を重視して導いていくということではないのかと思われます。

三昧発得

『選択集』第16章において、法然上人は「偏依善導」ということを説明します。なぜ偏依善導なのかというと、善導は「三昧発得」の人であるからだと言っているわけです。さらに善導の「本地」というのは阿弥陀仏だとも言っています。また、『選択集』には書いていないのですが、『選択集』を法然上人が書いた大きなきっかけは、ご自身が三昧発得したという体験であったということです。しかも、法然上人ご自身は、その後、何度も繰り返し体験しているのですが、ごく少数の弟子以外にはそれを伏せていたという事実があるわけです。

これは一体何なのかということを考えていったときに、ご自身の体験としては書いてはいないのですが、『選択集』には、念仏三昧について宣揚する文章がいくつか見られるわけです。例えば第11章には、「念仏三昧の功能超絶して実に雑善をもつて比類となすことを得るにあらざることをあらわす」とか、念仏三昧は「醍醐」であるとか、「ダラニ」であるとか、そういう例えも出しているわけです。善導が三昧発得の人であり、かつ、阿弥陀仏の化身であったように、法然上人ご自身も、少数の弟子以外には伏せていましたが、三昧発得の人であって、そして少なくともお弟子さんたちにとっては、法然上人というのは仏菩薩の化身であって、専修念仏を説いていたと考えられたのではないかと思います。

改めて考えてみますと、一切衆生の救われる道というものを説くことができるというのは、一般の人間ではないのではないかと思うわけです。しかも、今まで説かれていなかった専修念仏という非常に画期的な方法を編み出して、それを使ってあらゆる人を救っていくんだということを非常に強く打ち出し、多くの人にその教えを伝えたということは、これは普通の人間では考えられない。そういう意味で仏菩薩だと捉えられたのだと言うことができるのではないかと私は思っております。

一般に、近代の人間というのは、人間というのはみんな平等だと考えることが前提となっていますけれども、近代以前の人たちは別に、人間は平等ではなくて、人間のように見えている人でも普通の人間ではない、仏菩薩の化身が実は混じっていて、自分たちに教えを説いてくれているという感覚を普通に持っていたと思うのです。その感覚は近代人から見ると違和感があるのですが、例えば近代以前の人から見たら、全部、人間は同じと考えているほうが違和感があるのではないかと思うのです。そういうふうにかえたときに、仏菩薩の化身ということは、あり得るのではないかと、少なくとも、解釈としてはあるのではないかと思います。

よく法然上人と親鸞聖人とを比べ、「法然上人の教えを深めたのが親鸞だ」といいます。私は残念な解釈だと思うのです。やはり二人は全然別々だと思っています。法然上人がいなければ親鸞聖人の教えは成り立たないし、仏菩薩としての法然上人の教えを受けとめて、親鸞聖人があれだけ細かく体系化した『教行信証』を書かれたのだと思うのです。いわば法然上人は仏の視点で語り、それを受けとめた親鸞聖人はそれを人間の視点でもう一回、非常に丁寧に細かく整理し直した。もちろん整理の仕方というのは親鸞聖人の非常に大き

な努力があったと思いますし、そこに親鸞聖人の独自の視点が入ってきたということもあると思うのですが、仏の視点から語っているのか、人間の視点から語っているのかということは、本当に親鸞聖人と法然上人を分ける大きな違いで、そのところがわからなくなってしまったので、法然上人のすこみというのが近代人にとってなかなかわかりづらくなっていると思うのです。

なぜかというと、人間は皆平等であるという近代の人間観から出発すれば、人間の視点から語っているほうがわかりやすいのです。けれども近代的なものの見方が問い直されている現代にあつて、今ここで必要になってくるのは、人間の視点から語っていることを踏まえつつも、さらにその先にある、法然上人が仏の視点から語られている言葉をもう一度、受けとめ直していくということではないのかなと私自身としては考えます。このような視点から法然上人の言葉を受けとめつつ、非常につたないものではありませんが、私なりにお話しさせていただきました。

(了)

頼住光子／よりずみ みつこ

1991年東京大学大学院人文科学研究科修了。博士（文学）。

山口大学、お茶の水女子大学を経て、2013年東京大学人文社会系研究科倫理学専門分野教授に就任。

著書

『道元自己・時間・世界はどのようにに成立するのか』日本放送出版協会シリーズ・哲学のエッセンス、2005

『日本の仏教思想 原文で読む仏教入門』北樹出版、2010

『道元の思想 大乘仏教の真髄を読み解く』NHKブックス、2011

『正法眼蔵入門』（角川ソフィア文庫）2014

『ざとりと日本人・食・武・和・徳・行』ぶねつま舎、2017

法然上人 と 親鸞聖人

〔連載二十八〕——「綽空」から「親鸞」へ——

林田 康順

（大正大学教授）

法然上人と親鸞聖人の仏身論・仏土論の見極め③

本連載において私は、法然上人と親鸞聖人の仏身論・仏土論の根本的相違を多くの方々に見極めていただく場合、大きく三点に絞ってお伝えすることにしていくと述べました。第一点は、法然上人述『法然聖人御説法事』二七日・四七日・六七日における『観無量寿經』に関する御説示の大幅な削除の背景にある三業相応・指方立相といった阿弥陀仏や極樂浄土の輕視です（連載第十五回）。第二点は、法然上人ご自身が実践され、人々にも勧められた念仏相統の輕視に繋がる『阿弥陀經』の「若一日・若七日」等といった所説を自力念仏と規定する見解です（連載第十七回）。今号はその第三点、「綽空」から「親鸞」への改名について言及します。

「綽空」から「親鸞」へ―「空」を手放す―

親鸞聖人は、建永（承元）の法難によって法然上人と別離し、越後から常陸へ、そして京都へと戻られました。その途上で親鸞聖人は、光明に包まれる宗教体験を経たのです。その体験を通じて、法然上人が提示された「浄土三部経」の世界観を離れ、独自の世界観を確立することとなるのです。その生涯において親鸞聖人は「綽空」「善信」「親鸞」などと名のります。その名のりの時期や関係性については、「善信」実名説・房号説など、いまだに議論が決着していませんが、「綽空」から「親鸞」へ移行するという点については多くの研究者が等しく認めているところです。『教行信証』後序において親鸞聖人は、次のように述べられます。

愚禿釈の鸞…元久乙丑の歳、恩恕を蒙りて『選択』を書しき。同じき年の初夏中旬第四日に、「選択本願念仏集」の内題の字、ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」と「釈綽空」の字と、空の真筆をもって、これを書かしたまひき。…同じき二年閏七月下旬第九日…夢の告げによりて、綽空の字を改めて、同じき日、御筆をもつて名の字を書かしたまひをはんぬ。本師聖人（源空）今年は七旬三の御歳なり。（真宗聖典四七二―四七三）

（試訳）私、愚禿釈の親鸞は…元久二年、法然上人のお許しにあずかり、『選択集』を書写しました。同年四月十四日、「選択本願念仏集」という内題、ならびに「南無阿弥陀仏 往生之業 念仏為本」という冒頭の一節、そして「釈綽空」という私の名前を法然上人は親しく書写して下さいました。…同じ元久二年閏七月二十九日…私は夢

のお告げによって「綽空」という名前を改めました。その同じ日に法然上人は筆を手
に執って御自ら私の名前を書いて下さいました。法然上人は、この年、七十三歳であ
りました。）

親鸞聖人によれば、元久二年（一二〇五）四月には「綽空」と名のり法然上人から親し
くその名前を書写していただいたものの、同年閏七月になると夢のお告げによって自らそ
の名を改め、あらためて法然上人に新しい名前を書写していただいた、とあります。その
新しい名前は「善信」であるとも言われますが、『教行信証』を通じて親鸞聖人は「愚禿
釈親鸞」と記しているのです、やはり「親鸞」と考えるのが妥当ではないでしょうか。元久
元年（一二〇四）に勃発した元久の法難において法然上人が『七箇条制誡』をまとめ、
百九十名の弟子達に署名を求めた際、親鸞聖人は「僧綽空」と署名されています。「綽空」
の「空」は法然上人の諱である「源空」の「空」に通じています。しかし、最終的に親鸞
聖人は、自身の名前を「親鸞」に改め、それを終生名のり続けたのです。

思うに、名前はとても大切なものです。私は「康順」と言いますが、これは私の両親が
幾多の思いを込めて命名してくれたものですし、二人の息子にも私達夫婦の万感の思いを
経て命名しました。読者の皆様のお名前も、そのお子様のお名前もそのようにして命名さ
れたことでしょう。もちろん当時は、今のような親子関係と同一ではありませんが、それ
と同等の、いやそれ以上の真摯な思いを込めて師匠から弟子に僧名が授けられたことで
しょう。法然上人はその師叡空上人から、比叡山で教えを受けた「源光」「叡空」という
二人の師の名前からそれぞれ一文字ずつを採って「源空」という名前を授かりました。法
然上人は、比叡山を離れ、浄土宗を立教開宗された後も「源空」という名前を大切にされ、

終生その名を名のり続けられました。それは取りも直さず法然上人が「源光」「叡空」両師から受けた御恩を終世忘れなかったからでありましょう。「源智」上人や「証空」上人といった法然上人の弟子たちも「源」「空」という師からいただいた名前を大切にしてい、師法然上人を仰ぎ尊びながら、その生涯を全うされました。ところが親鸞聖人は、「源空」の「空」が入っていた「綽空」を自ら手放し、「親鸞」へとその名を改められたのです。

世親菩薩と曇鸞大師の選り——法然上人と袂を分かち——

親鸞聖人が、終生法然上人を仰ぎ尊ばれたのは言うまでもありません。それは、文応元（一二六〇）年十一月、八十八歳になられた親鸞聖人最晩年の消息によって明らかであり、多くの和讃や法語が証明するところです（連載第三回・第四回）。しかし、その思いは、親鸞聖人が詠まれた『高僧和讃』等からも知られるように、法然上人が善導大師に向けられた「偏依」という姿勢とは大きく異なるものです。親鸞聖人は、インド・中国・日本の三国伝灯の祖師の中から、龍樹・世親・曇鸞・道綽・善導・源信・法然という七祖を選んで七高僧と位置づけ、彼等の教義を重層的に採用して独自の教義を構築されます。とりわけ親鸞聖人は、自身が見出した信仰の核心部分を世親菩薩の『往生論』と曇鸞大師の『往生論註』に求められます。

すなわち親鸞聖人は、『教行信証』真仏土文類の結語において次のように述べられます。

真仏といふは、『大経』（上）には「無辺光仏・無碍光仏」とのたまへり。また「諸仏中の王なり、光明中の極尊なり」（大阿弥陀經・上）とのたまへり。以上。『論』（淨土論）には「帰命尽十方無碍光如来」といへり。真土といふは、『大経』には「無量

光明土」(平等覺經・一)とのたまへり。あるいは「諸智土」(如來會・上)とのたまへり。以上。『論』には「究竟して虚空のごとし、廣大にして辺際なし」といふなり。

(真宗聖典三七二)

(試訳 眞実の仏とは、『大無量壽經』には「行き届かないことはない無辺光の仏、遮られることはない無碍光の仏」と述べられ、また『大阿彌陀經』には「諸仏の中の王であり、すべての光明の中でもっとも尊い」と説かれ、世親菩薩の『往生論』には「尽十方無碍光如來に歸命する」と言われています。眞実の淨土とは、『平等覺經』には「無量光明土」と述べられ、あるいは『無量壽如來會』には「多くの智慧を具えた仏土」と説かれ、『往生論』には「この上なく勝れていることは虚空のようであり、廣大で窮まることがない」と言われています。)

このように親鸞聖人は、『無量壽經』の各種異訳經典に基づいて光明を前面に押し出した眞実の仏と淨土について明らかにし、とりわけ世親菩薩の『往生論』を眞仏・眞仏土の両者にわたって典拠に採用しています。さらに親鸞聖人は、その「歸命尽十方無碍光如來」を書写して名号本尊として尊び、広く勧めておられます。

あるいは親鸞聖人は、『教行信証』証文類において『往生論』と『往生論註』に説示される往相・還相の二種回向を長文にわたって引用した上で、その結語において次のように述べられます。

しかれば大聖の眞言、まことに知んぬ、大涅槃を証することは願力の回向によりてなり。還相の利益は、利他の正意を顕すなり。ここをもつて論主(天親)は廣大無碍の一心を宣布して、あまねく雑染堪忍の群萌を開化す。宗師(曇鸞)は大悲往還の回向

を顯示して、ねんごろに他利利他の深義を弘宣したまへり。（真宗聖典三三五）

（試訳）以上のような釈尊による真実の経文によつて、無上のさとり の体得は、阿弥陀仏の本願力の回向によつて完成することが知られます。還相によつてもたらされるさとり の境地の体得は、阿弥陀仏が衆生を救おうとされる御心に基づいているのです。こうしたことを世親菩薩は、何ものにも妨げられない広大な功德を備えた阿弥陀仏の一心の宣揚によつて明らかにされ、煩惱に覆われている衆生を教え導いて下さいました。また曇鸞大師は、往相と還相の二種の回向が共に阿弥陀仏の大いなる慈悲に基づいていることを明らかにされ、それらすべてが阿弥陀仏の利他の働きであるという深い意味合いを丁寧に説き広めて下さったのです。）

このように親鸞聖人は、特に『往生論註』に詳述される二種回向を独自の視点で解釈し、それら二種回向がすべて阿弥陀仏の働きに他ならないと主張されたのです。

いずれにしても親鸞聖人は、光明に包まれる宗教体験を経た結果、『往生論』所説の「十方無碍光如来」に強く共鳴し、「世親」菩薩と「曇鸞」大師の教説を自身の教義に大いに取り込み、その結果、その名前の一字ずつを採つて自ら「親鸞」と名のつたのです。こうした「綽空」から「親鸞」への改名は、法然上人が導き出された「浄土三部経」と「偏依善導一師」という経釈に基づく世界観から袂を分かつのだという静かな意思表示であり、「世親」菩薩と「曇鸞」大師が開示する阿弥陀仏と極楽浄土に基づく世界観に移行するという強い決意表明に他ならないのです。

その結果、法然上人と善導大師の研究が浄土宗学を中心となるのに対し、親鸞聖人と曇鸞大師の研究が真宗学を中心となるという現状は今も続いています。

（続く）



微

風

吹

動

揺るぎない焦点を囲む

明るい道と暗い道

狭間の小道を進むんだ

あなたが教えてくれたのは

楕円の夢の美しさ

(寺尾紗穂「楕円の夢」より)

導 量 藤 工

「きれいな田になりましたよ」とある授業の一場面。手をつないだ生徒たちは迷わず真ん丸を形作った。きつと互いに均等な力で引っ張り合ったのだろう。では、もし強すぎたり、弱すぎたり、それを上手にできない子が混ざっていたら？ ふと、みんなの輪に、当たり前にはなじめない不器用な生徒の存在を思い浮かべた。

十年ほど前、大正大学の先輩たちと共に、路上生活者を支援するボランティア団体「ひとさじの会」を結成した。現在にいたるまで浅草や上野周辺のホームレス状態のおじさんたちに手作りのおにぎりや医薬品を配る活動を休むことなく続けている。

東日本大震災から間もなく、寺尾紗穂さんというシンガーソングライターからひとさじの会宛に、『ビッグイシュー』というホームレス支援雑誌を応援するイベントが行えるお寺をどこか紹介してもらえないかと打診があった。それから毎年、浄土宗寺院である青山の梅窓院を会場に、誰もが「隣」の人と「輪」になり歌を楽しもうという「りんりんふえす」なる音楽イベントを催している。

二〇一四年のイベントのステージ上で、寺尾さんは仙台の知人から、『ビッグイシュー』を販売するおじさんが三年たってもいまだに路上生活を卒業できないけれど大丈夫だろうか、と問いかけられたと話した。それに答えて、「アパートに入る『幸せ』というわけ

でなく、路上で交流のあった人たちとのコミュニケーションがなく
なると、決して器用でない彼らはかえって孤独に陥ってしまうこと
もある。だから正解は必ずしも一つではなく、ある種の曖昧さも大
事ではないか、そんなことを伝えたという。そして「楕円の夢」と
いう新曲を披露する前にこう語りかけた。

「なぜ楕円かというと、円は中心が一つで、楕円は焦点が二つあり
ます。その点と点の距離で、細長い楕円にもなるし、円に近い形に
もなる。私はいろんな形、いろんな答えがあることがとても大切だ
と感じています。固定観念にとらわれてしまうのも、一つのあり方
にこだわってしまうからではないでしょうか」。

寺尾さんの念頭には、高校の授業で習った、惑星の軌道が真円で
はなく、実は楕円であると証明したケプラーの法則があったようだ。
当時のキリスト教の世界観では、神さまの作った宇宙や惑星の軌道
は真円でできているという常識があり、それを科学的な観察によっ
て覆したのだ。仏教でも、仏の教えは円教といって満ち欠けのない
完璧で究極的な教えとされ、法然上人の時代も、円教を頂点に、そ
れを目指してひた歩むという考え方が一般的だった。

そのような見方からすれば仏道には自ずと二つの道が立ち現れて
くる。真円たる仏の悟りを目指す道と、それをあきらめてしまう道

だ。若き日の法然上人は仏典を繰り返し読み、何度も何度も円を描き続け、誰もがきれいな円を描けるようになる方途を模索した。しかし、純粹な真円を描くには確固たる敬虔さが必要で、少しでも心乱れるような凡人にはあまりにも難しい。そうして幾千幾万もの円を描き暮れる日々の中に、とうとうあの運命的な一文を、狭間を縫うような細い小道を見つけたのだ。

それは遙か時空を超えた中国の長安で善導大師が遺した、仏道をあきらめなくてよいもう一つの道。というまったく斬新な考えだった。猥雑で寄る辺ない私たちのために、お釈迦さまが希みを託して説きすすめ、阿弥陀さまがまるごと抱き迎えてくれる浄土への道。独りで円を描くのではなく、みんなと一緒に輪を作るのだ。

二人の想いが折り重なった夢の軌跡はどんな形だろうか？

強く引っ張る人も、力なくぶら下がる人も、ほどよく塩梅する人も、家のある人もない人も、あらゆる性別の人も、どんな隣の人も共に、法然さんと善導さんと手をつないで、阿弥陀さまとお釈迦さまという揺るぎない二つの焦点を囲む、いびつで、美しい楕円の輪。私たちの欠如や曖昧さをゆるすやわらかな月の光を浴びながら、二人の夢の続きをあきらめず、踊り、うたい継いでゆく。私はそんな宇宙に輪をかける楕円の奇跡を夢想したい。

江戸の川
を歩く

第三十四回

江戸ウォーカー

森
清鑑

利根川

利根川は関東八州、広い関東平野を網の目のような水系を維持しながら北から南、そして東へ、太平洋に注ぐ、日本を代表する河川である。利根川水系が肥沃な関東平野を育み、日本随一の穀倉地帯に育てた。正に母なる川である。家康の江戸造りの基本構想はこの利根川が生み出す肥沃な実りを最大限活用することを根底としている。大都市江戸は利根川が造ったといっても過言ではない。

水源地は

おおみなかみやま

大水上山の山頂

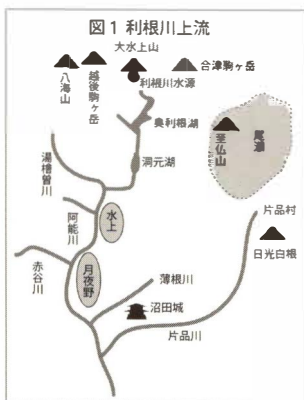
利根川は余りにも水系が多岐にわたるので、江戸時代には水源地がどこか特定されていない。今は分かっている、どこか。大水上山の山頂である。この山は新潟県魚沼市と群馬県利根郡みなかみ町

の境目にあり、標高は一千八百三十四メートル。群馬県の北限に当たる。この山頂に行くには、普通、越後駒ヶ岳や尾瀬至仏山などから稜線を辿っていく。山頂に立つと見渡す限りの山並みが展開している。大きな雪渓がある。これが利根川の一滴を生み出す。山頂部に大きな岩。そこに「利根川水源」とのプレートがはめ込まれている。

利根川上流

細い流れは南に下る。しかし、水嵩はどんどん増し、至仏山しぶつさん、朝日岳あさひだけ、巻機山まきはたやまの中間に。ここは

今、奥利根湖が形成されている。矢木沢ダム。少し下ると、また洞元湖、藤原湖（水源ダム）があり、そこを

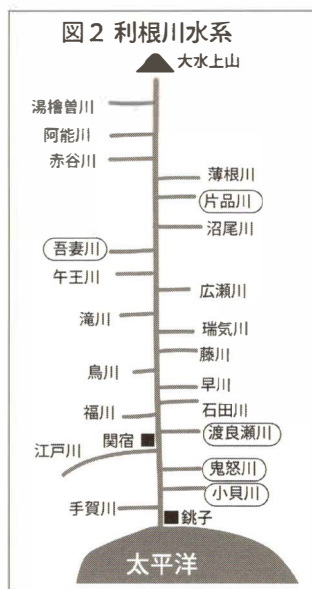


出ると流れは蛇行しつつ、西へ向かう。するとこの本流に谷川岳東側を流れ下る湯檜曾川が流入する。流れはかなり豊かになり、水上の温泉街を抜け、沼田へ。月夜野で赤谷川が流入。この川の水量も豊富。利根川は、さらに川幅を増す。そこに東から片品川が合流。片品川は、尾瀬の南、沼田、片品村を通り、利根川に合流する極めて水量豊富な川。そこで利根川の川幅はさらに広がる。蛇行しながら、南へ下る。そして渋川。西から大きな河川、吾妻川が合流してくる。浅間山の麓、嬬恋村から発した吾妻川は万座、長野原草津口を通り、風光明媚な吾妻溪谷を形成（八ッ場ダム）。中之条で四万川を加え、さらに大きな流れとなつて利根川に合流してくるのである。しばらく行くと、これまた水量豊富な烏川が西から合流。此処にいたって利根川は大規模な河川敷を形成する。太田の東を流れ、さらに古河で北からすでに大きな河川敷を持つ渡良瀬川が合流する。凄水量である。ここから矛先は一路銚子に向かう。関宿を過ぎたところで左から一級河川の鬼怒川が日光から流れ

家康入府以前の 利根川の流れ

ところが家康が一五九〇年江戸に初めて入府し

込んでくる。さらにちよつと行くとこれまた豊富な水量を誇る、小貝川が加わる。その上、銚子に近づくと霞ヶ浦から流れ出る、新常陸川が加わり、利根川本流は、まるで湖のような広さになって銚子から太平洋に抜け出るのである。とまあ、これが現代の本流の大まかな流れである。



たときには利根川の流れはまるで違っていた。利根川本流は今の江戸川より手前で折れ曲がり、直接、江戸湾に流れ込んでいた。この流れに、横から荒川、入間川が繋がりを、渦のような流れとなつて江戸湾へなだれ込んでいたのである。そして渡良瀬川といえ、この利根川と縦に平行して江戸湾に流れ込んでいたのである。今日の江戸は全て、葦が茂る沼地。湿地帯。当たり前である。銚子の方は、常陸川があるだけで、利根川本流の曲がり角からずっと陸地が続き、常陸川の先端に出る。何の繋がりも無い。

河川の統合整理

家康が断行した利根川東遷事業の根本は、この利根川本流を常陸川に繋げ、銚子へ流すこと。そして江戸湾に流れ込んでいる渡良瀬川を裁ち切り、利根川に流す。そこから先、西から利根川に繋がっていた荒川を切り離す。荒川を江戸湾に向けさせ、隅田川となす。そして利根川経由の、江戸への重

要な物資運搬路として江戸川を掘削する。関宿から江戸湾に向け嘗ての渡良瀬川の残留に繋げる川を掘削し、江戸湾へ。これが江戸川。もう一つ、嘗ての利根川の分流、元利根川を整備し、真つ直ぐ江戸湾に流す。これが中川。これで江戸湾に流れる三本立てが揃い、今度は江戸湾に沿って、横一線に三本を繋げる新川、小名木川を掘削し、

図3 家康入府時の利根川の流れ

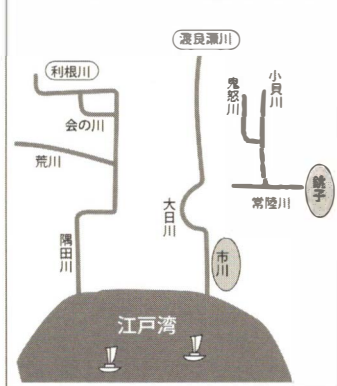
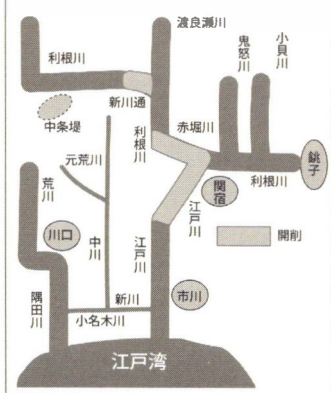


図4 利根川の東遷



隅田川に繋げる。こうして利根川水系を利用した物流水路網を造る。これが江戸の大都市化を推進した。一応の基礎工事が全部終了するのに、六十年余。ほぼ完成したのは一六六五年と云われる。その後も、関連工事は幕末まで続く。

伊奈忠次、忠治、 忠克——親子三代

一五九〇年この地に入った家康は考えた。これは十年やそこらでできる仕事ではない。現場責任者は家康無き後も、意志を次いで実現してくれる人物。それには特殊な技能を持ち、しかも絶対に信頼できる人物であること。もつと言えば、治水の大変な能力があり、膨大な関東平野を豊かな農業、酪農生産地帯に変えられ、農村に希望を与え、豊かにしてくれる政治能力も備えた人物。そして大都市江戸の建設構想を理解している人物。こうして忠臣の中から選ばれたのが伊奈忠次である。

忠次は信長本能寺の変後、家康の伊賀越えに貢献し、助けてくれた人物でもある。しかし過去に例を見ない、スケールのかい、とてつもない大工事。伊奈家親子三代に亘る苦闘が始まる。

家康は忠次を呼び寄せ、利根川沿いに任地（埼玉県北足立郡伊奈町、鴻巣）を与え、治水奉行を含む、関東代官頭に任命する。忠次は家康江戸入府以前に、命令により関東の地政調査をしていたので、利根川の有効利用が江戸造りの成否を決めると家康に進言したものと思われる。彼は、大規模洪水を常時起こし、とても人が住めるところではない行田市に大規模な中条堤を設ける。これは上流から乱入してくる水を食い止め、貯水してしまいう堤防工事で、その貯水能力は一億立方メートル。今でも田圃の中を延々と堤防が続く大工事である。これで利根川の洪水がとまった。次いで会いの川の締め切り工事（羽生）に取りかかる。これが利根川東遷工事の端緒になる。その功績は、検地、新田開発、河川改修はもとより、農民に炭焼き、養蚕、製塩、桑、麻等の栽培方法も伝授と

多岐に及んでいる。ここで彼の寿命は尽きる。

忠次の具体構想を引き継いだのが次男の忠治である。一六一八年関東代官頭も引き継ぐと、一六二一年、一気に父の構想、利根川東遷事業に掛かる。まず、新川通りを開削し、利根川を渡良瀬川に繋げる。つまり、江戸に流れていた渡良瀬川を遮断し、利根川に。大工事である。そして常陸川（銚子）と繋げるために、赤堀川を掘削する。途中、関宿から江戸川を掘削し、嘗ての渡良瀬川の流跡に繋げる。利根川本流となった、常陸川を広げ、広大な河川敷を設ける。そして、もつれるように常陸川に流れ込んでいた大河、鬼怒川と小貝川（洪水の温床）を切り離し、縦に並べて利根川に落とす。双方とも、急な流れ。大変な難工事。さらに古利根川の流れを生かし中川を開削。嘗ての利根川に横から流れ込んでいた荒川を遮断し、川口から曲げ、江戸湾に直接向かわせ、隅田川となす。そして最終的な運搬路、江戸川と中川を繋ぐ、新川、中川と隅田川を繋ぐ小名木川を海岸縁に掘削し、行徳からの塩のルートとなす。かくて東北、

関東一円からの物資を江戸の中枢に運搬する水路がこれでできあがったわけである。すなわち、江戸に近い利根川水系のほとんどが人工的に造られたことが分かる。

難工事に次ぐ難工事、資金不足、流路選定の難しさ、住民説得、これら乗り越え、やり遂げた伊奈半十郎忠治は江戸随一の功績者としか言いようがない。しかし、最後に完成させたのは忠治の子、忠克でここに六十年に及んだ利根川東遷事業は一応完成する。伊奈家はその後も、幕末まで関東代官頭を引き継ぐ。これは、希有なことである。治水、生産物増産、流通の合理化に貢献。処の人々にとつては、正に、神様扱い。鴻巣市勝願寺にある伊奈忠次、忠治の墓には線香が絶えることがない。鬼怒川と小貝川が絡み洪水の温床であったところを忠治は切り離し、洪水は解消された。なんと昭和十六年、処の人々ここに伊奈神社を建立。現代に至まで、人々の感謝の念は絶えない。

●小説 快僧渡辺海旭

壺中に月を求めて

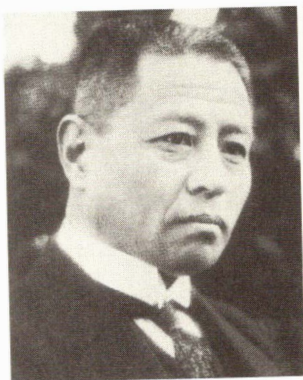
前田和男

第一〇三回

第三部

充実と稔りの白秋へ

波沢栄一との謎にみちた親交 その二



「仏教護国団」で海旭と洪沢は友好関係へ

前号で紹介したように、渡辺海旭が帰国して二年後、明治から大正への「御代替わり」の段階では、海旭と洪沢栄一は、友好どころか敵対的、それも非妥協的なその関係にあった。その要因となったのは、一つは時の政権による仏教、キリスト教、神道の「三教派」を融和させようとする「三教会同」の動きであり、もう一つはその四か月後、実業界の大立者、洪沢栄一が諸宗教の協調・協力を企図して立ち上げた「婦一協会」である。

海旭は両者を「一つの動き」と見て、「三教会同」については、「内務省をつかった宗教の利用」と警戒心を抱きつつ、「時期尚早」の論陣を張ってこれを退け、洪沢の「婦一協会」については、民心を宗教でまとめようとする前に「富豪がなすべきは救貧の実践である」と手厳しく断じた。

しかし、それからわずか五年後の大正五年、

二人の関係は「敵対」から「友好」へとコペルニクスの転換をとげる。なにが契機となったのか？ 今回、洪沢栄一史料館で得た膨大なデジタル資料をつぶさに解読した結果、どうやらそれは同年の「仏教護国団」の設立にあったと思われる。

なお「仏教護国団」とは、大正五年十一月五日、仏教各宗五十六派により結成された団体である。詳しい経緯と評価は後に検証するが、要するに、これは時の政権による「三教会同」と洪沢の「婦一協会」の「発展形」とみていいだろう。

なぜ海旭と洪沢の関係が「敵対」から「友好」へと転じたのか、その追究は後に譲り、まずは「仏教護国団」の設立における海旭と洪沢との関わりをみてみよう。

各界の綺羅星が列席

『洪沢栄一伝記資料』（本編全五十八巻、別巻全十巻）の四十二巻によると、大正五年十

一月五日、芝増上寺に於いて「仏教護国団」の発会式が挙行され、仏教各宗五十六派から二千人を超える僧侶が参集、そこへ洪沢は「来賓」として招かれて演説を行なったとして、その内容が詳しく紹介されている。

ちなみに洪沢を含む来賓と「演題」は以下のとおりであった。

「歴史上より見たる護国団」文学博士・村上専精

「希望」床次竹二郎（政友会幹部）

「実業界より見たる護国団」男爵・洪沢栄一

「日本国体と仏教」海軍中将・宮岡直記

「所惑」河野広中（憲政会幹部）

「和魂化せる宗教」陸軍中将・堀内文次

いずれも、往時の日本の政治・実業・軍事・学術文化を代表する綺羅星で、ここからも「仏教護国団設立」が明治から大正への「御代替わり」における重大な国家イベントであったことが推察される。

実業界も仏教護国団に期待

さて、洪沢の「挨拶」はこんな内容であった。まず十数年前に来訪をうけたドイツ人とのやりが紹介される。

ドイツ人「欧州の例をひけば、数百年継続した政権が異動する場合は、長い間波乱に波乱を重ねた。それなのに、明治維新の大改革はどうして若干の波乱でおさまったのか」

洪沢「日本の国体の然らしむるところである。一般国民の精神には常に皇室の為には生命を賭して働く覚悟があり、それゆえ多少の物事が起つても、明治の聖代を生むことができたのである」

ドイツ人「ならばその国体（とそれ支える国民精神）はどうやって維持されてきたのか」
洪沢「明治維新以前、武士は儒教によって国体を維持し、一般人民は仏教によってその精神を養成してきたからである」

ドイツ人「しからは、その儒教と仏教には

今後とも昔のように人心を維持する力はあるのか。もしなしとせば、日本の将来は憂慮すべきものになりはしないか」

洪沢「そのとおりである。しかし仏教は千数百年来の歴史ある国民の宗教であるから、いずれは相当の進歩をなすはずだと信じている」
以上を紹介した上で、洪沢は「挨拶」をこ
う結ぶ。

「このたび、仏教護国団が設立されて、十年
来の私の思いがようやく成就した。(私が身をおく)実業界も、仏教護国団には大いに関係と
関心がある。物質文明の完全なる進歩には必
ず信仰が伴う必要があると信じるからである」
これは洪沢のかねてからの持論であり、同
年の春「仏教護国団」結成の話が持ち上がったときにも、早くも雑誌「竜門」に「日本の
精神と仏教徒」と題する一文を寄せ、こう記
している。

「仏教徒が団結して、或は老人に青年に、思
想上の信仰を為さしめたならば、真に国民の

精神の統一が出来て、国運が發展してゆくに
違ひない。実業界から仏教の護国団に対して
は、間接に大なる関係がある。物質文明が完
全に進むには、これ丈進歩したのでは駄目で
ある。信仰が完全に進まなくては、物質文明
が完全の域に達したとは云ひ得ない。この意
味に於て、自分は実業界から仏教徒に対して
大いに希望する所である」

これは、五年前の「婦一協会」を立ち上げ
た時から一貫した洪沢の姿勢であった。

渡辺海旭は「転向」したのか？

では、洪沢の姿勢を「民心を宗教でまとめ
ようとする前に富豪がなすべきは救貧の実践
である」と手厳しく断じた海旭はどうだった
のか？

同じ『洪沢栄一伝記資料』の四十二巻には、
洪沢の来賓挨拶の後に、以下のくだりが紹介
されている。

「仏教連合会を代表して幹事弘津説三師壇に

昇り、方今内外の情勢より、仏教護国団の設立せられざる可らざる所以並に設立の経過を述べ、次で東京仏教護国団発起人を代表して安藤正純氏登壇、政治・教育・実業各方面に於ける日本現在の文明の欠陥を痛論し国民精神の結合統一を図るは刻下の急務にして、徳教の任に膺る我仏教徒の責務なり、是れ東京仏教護国団の起る所以なりと結び、渡辺海旭氏宣言並に綱領を朗読して、満場拍手裡に之を決議す」

なんと海旭は、かつて距離をおいていた「三教会同」の継承発展である仏教護国団に、結成宣言と綱領朗読という旗振り役を果していたのである。いったい、どうなっているのか。この五年間に何があったのか。しかし、一方で、どうやら率先して大役を引き受けたわけでもないらしい。実は海旭は、仏教護国団結成を目前にして、「仏教護国団の成立に際し」と題する一文を「浄土教報」に寄せているのである。「(今の教界の諸先輩は)消極的に帝国の前途

を悲観し偏狭なる国家主義を迎合して一種のショービニストの団体を造らんとするの傾あるは蓋し時代逆行の愚を学ぶものにあらずして何ぞや(中略)護国団就らんとす。即一言を該団成立関係の諸宿老に呈して、真正護国の精神の確立を望み、同団が時代指導の積極的健全なる団体たるに至らんことを希ふ」(大正五年十月)『壺月全集』下巻二四三、二四四頁)

ここには、仏教護国団が「宿老」たちによって「偏狭なる国家主義」の道具とされる危険性が指摘されている。それなのに、なぜ「旗振り役」を務めたのだろうか? そこには何があったのか?

実はこの五年間に、仏教をふくむ宗教界は実は大きな歴史的課題を突き付けられ、海旭もそれに無縁ではなく、それが結果として渋沢との生涯にわたる強い結びを生んだと推察されるが、それについて、いっそう妄想力を逞しくしながら説明をしていこうと思う。

(つづく)

謹賀新年

令和二年

浄土宗総本山知恩院門跡
浄土門主

伊藤唯眞

大本山 増上寺
法主

八木季生

大本山くろ谷 金戒光明寺
法主

久米慶勝

大本山 百萬遍知恩寺
法主

福原隆善

〒606-8225 京都市左京区田中門前町一〇三

大本山善導寺
法主

阿川文正

大本山光明寺
法主

柴田哲彦

鎌倉市材木座六・十七・十九
TEL 〇四六七 (一一)〇六〇三

大本山善光寺大本願
法主

鷹司誓玉

〒380-0851長野市元善町五〇〇

謹 賀 新 年
令和二年

浄土宗事務総長

川 中 光 教

法然上人御誕生地
浄土宗特別寺院

美 作
誕 生 寺

〒709・302 岡山県久米郡久米南町里
TEL〇八六（七二八）二一〇二
FAX〇八六（七二八）二一六二
方八〇八

(学)大乘淑徳学園
理事長

長 谷 川 匡 俊

〒174・8646 東京都板橋区前野町五十五・二

学校法人 淑徳学園
淑徳SC中等部高等部

理事長
校 長
麻 生 諦 善

白本尊阿弥陀如来・
家康公念持佛

静 岡
宝 台 院

住職 野上智徳

赤坂六地藏尊

浄 土 寺

〒107・0052 東京都港区赤坂四・三・五

住職 阿川正貴

鶏頭山安楽寺

飯 田 實 雄

〒399・4115 駒ヶ根市上穂栄町九・五
電話〇二六五（八三三）一三二六〇

清水湊

忠 高 山
實 相 寺

〒112・0002 東京都文京区
小石川三丁目十四番六号

無量山
傳 通 院

電話〇三（三八一）三七〇一（代表）

家康公祖母菩提所

玉 桂 山
華 陽 院

住職 堀田卓文

勝 願 寺

〒365・0038 埼玉県鴻巣市本町八・二・三一
電話〇四八（五四一）〇二二七

お骨仏の寺

一 心 寺

〒543・0062 大阪市天王寺区達阪二・八・六九
電話〇六（六七七二）〇四四四

謹 賀 新 年
令和二年

九品阿彌陀如来

淨 眞 寺

〒158-0083 世田谷区奥沢七・四一・三
住職 清水英碩

宮城県仙台市

定義じようぎ如来 西方寺

住職 大江田 絃義
前住職 大江田 博導

岩淵

天王山 正光寺

〒115-0041 東京都北区岩淵町三十二・十一

無縁寺

回 向 院

〒130-0026 東京都墨田区両国二・八・十
電話〇三(三六三四)七七七六

投込寺 淨閑寺

戸 松 秀 明

〒116-0003 荒川区南千住二・一・一二

古今伝授の寺

天主君山 願成寺

〒411-0022 静岡県三島市川原ヶ谷十八
メールマガジン 住職 魚尾孝久
ganjoji.com unio

塩竈市 雲上寺

東海林良雲

五劫山 愚鈍院

〒984-0051 仙台市若林区新寺二・十二・十七

寿福山 寛慶寺

水 科 善 隆

〒380-0832 長野県長野市東之門町四〇六番地
電話〇二六(二三三)一八一二

大吉寺住職

アジアカター連盟 会長
国際カスナー連盟 執行役員
公益社団法人 日本カター連盟

成 田 昌 憲

〒154-0017 世田谷区世田谷四・七・九

梅窓院 住職

中島真成

東京都港区南青山 2-26-38
電話 03 (3404) 8447
ホームページ
<http://www.baisouin.or.jp>



「のらくろ寺」・「のらくろ和尚」
住職 飯島英徳

北海道室蘭市
満岡寺・善行寺
(0143)22-4677・44-2695

謹 賀 新 年
令和二年

浄土宗東京教区
教区長

高 橋 誠 実

無量寺
〒158-0097 世田谷区用賀四・二〇・一

浄土宗東京教区教化団団長
浄心寺住職

佐 藤 雅 彦

〒113-0023 文京区向丘二・一七・四

鎌倉大仏殿

高 徳 院

〒248-0016 鎌倉市長谷四・二・二八
電話 〇四六七 (二二) 〇七〇三
FAX 〇四六七 (二二) 五〇五一

浄土宗議会議員
埼玉県佛教会副会長

蓮 馨 寺

住職 桑原恒久

〒350-0066 川越市連雀町七・一
電話 〇四九 (二二) 〇〇四三
FAX 〇四九 (二二) 〇六七六

浄土宗東京教区教区議会議長

村 山 好 信

良信院
〒135-0022 江東区三好三・七・五

願行寺

佐 藤 久 雄

〒140-0004 品川区南品川二・一・二二

光円寺住職

佐 藤 良 純

〒112-0002 文京区小石川四・二・八

森巖寺

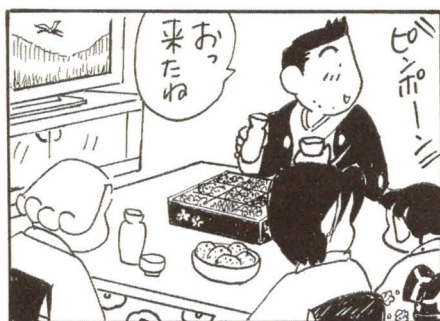
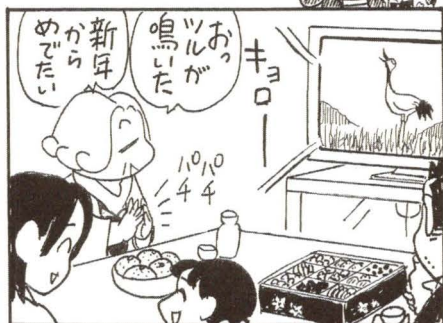
加 藤 昌 康

〒155-0032 世田谷区代沢
三・一七・一

かまち♡ぷいろう

167

かい目



かまちよろう先生作新聞四コマ漫画「ゴンちゃん」が各地方新聞に掲載されています。(京都新聞・静岡新聞・山梨日日新聞・北日本新聞・福島民報・宮崎日日新聞・新日本海新聞・神戸新聞・岐阜新聞・中国新聞・四国新聞・徳島新聞)

編集後記

若水で清めた口に酒注ぐ

岱潤

今年は終戦から七五年を数え、そして平和の祭典とされる東京オリンピック・パラリンピックが開催されます。その基本コンセプトは、「全員が自己ベスト」「多様性と調和」「未来への継承」の三点だそうです。その「多様性と調和」の解説にこうあります。「東京二〇二〇大会を、世界中の人々が多様性と調和の重要性を改めて認識し、共生社会をはぐくむ契機となるような大会とする」というのです。この方向性は二〇一五年に国連に於いて一九三の国と地域が全会一致で採択しSDGs（持続可能な開発目標）と一つに

するものです。

SDGsとは「誰一人取り残さない」をコンセプトに、十七の目標を立てて、二〇三〇年までに実現することを目指したもので、世界を変えるための課題、「貧困をなくそう」、「全ての人に健康と福祉」、「ジェンダー平等の実現」、「安全な水とトイレを世界中に」、「人と国の不平等をなくそう」、「平和と公正を全ての人に」といった、人権と平和に関わる問題、今まさに取り組まなければならない課題を挙げ、世界中の指導者に示したものです。まさに仏教でいう「自利利他円満」の思想です。

オリンピック・パラリンピックは、そ

ういう思想の中で行われるものなのです。間違ってもナショナリズムを煽動するために行われることではないことを、確認をしておきましょう。

冒頭の三つの基本コンセプトを、読み返しておきましょう。

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤
斎藤晃道
佐山哲郎
青木照憲
村田洋一

浄土

八十六巻 一月号 頒価六百元
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 令和元年十二月二十日
発行 令和二年一月一日

発行人 佐藤良純
編集人 加藤昌康

印刷所 株式会社 晩印刷

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七四明照会館四階

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三三七八)六九四七

FAX 〇三(三三七八)七〇三六

振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々

飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
庵谷勝正(目黒・祐天寺)
魚尾孝久(三島・願成寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
加藤昌康(下北沢・森巖寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
桑原勇慈(甲府・瑞泉寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤久雄(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
河本悠大(函館・称名寺)
高口恭典(大阪・一心寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村瑞貴(仙台・愚鈍院)
成田昌憲(世田谷・大吉寺)
野上智徳(静岡・宝台院)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓文(静岡・華陽院)
本多将敬(両国・回向院)
松濤泰彦(芝・寶松院)
水科善隆(長野・寛慶寺)

(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://jodone.jp/>
メールアドレス hounen@jodone.jp

写経と写詠歌セットのご案内

特徴① 奉書の手本に筆ペンで直接なぞる

特徴② 法事や行事の待ち時間で写せるA4判

特徴③ 手本は当会オリジナル

特徴④ 「写経セット」は浄土宗日常勤行式。

特徴⑤ 「写詠歌セット」は宗歌と四季の和歌。



従来の写経と異なる薄墨をなぞる写経と写詠歌のセットです。扱いやすいA4版で筆ペンで写せます。手軽にかつ短時間でできる新しいタイプの写経、写詠歌ですが、高級奉書を使用していますので、墨と毛筆でも写せます。法事や各種行事、詠唱会の待ち時間に、朝夕のお参りの前後に、新たな写経・写詠歌行事にご利用下さい。

申込日 年 月 日

御名前 電話 ()

御住所 〒

《御寺院欄》 教区 組 寺・院 寺院番号

①写経セット 領価:12,000円(税込) 関東・関西 セット
(1組12枚、10組入り) ※寺院名 () を入れる・入れない
※関東版(三奉請)、関西版(四奉請)に丸をおつけ下さい。

②写詠歌セット 定価:10,000円(税込) セット
(1組5枚、20組入り)

※写経セットの寺院名入れは無料です。ご希望の場合は寺院名をお書き下さい。
※消費税と送料は領価に含んでいます。商品お届け時の請求書にてお支払い下さい。
※ご注文をいただいてからお届けまで3週間ほどかかりますので、ご了承下さい。
※1組からご注文ご希望の方はFAXにて当会にご相談下さい。

《本頁をコピーの上、注文を記入して、法然上人鑽仰会へ
Fax (03-3578-7036)、メール (hounen@jodo.ne.jp)、または
郵送(〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館4階)下さい》

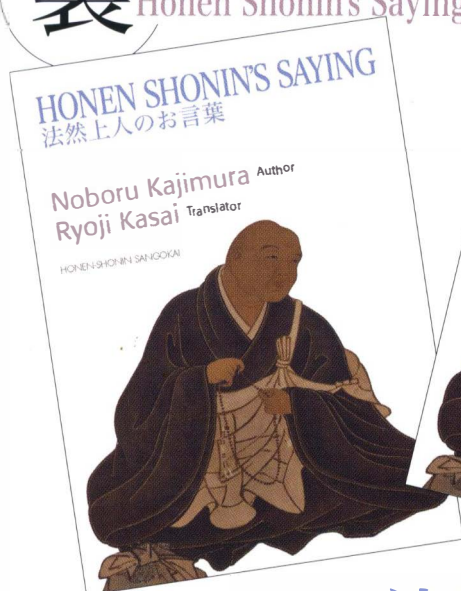
月刊**浄土**の連載が
単行本になりました。

裏

左開きで英文の
Honen Shonin's Saying

表

右開きで和文の
ご法語



和英対応**法然上人のお言葉**

梶村 昇・著 河西良治・訳

ご法語と解説が和文と英文で一冊になりました。

外国の方のお土産にも最適です。A5判・124ページ 頒価 1,000円（税別）

電子書籍は下記 QR コードよりご購入いただけます。

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

日本語版 (Japanese)

英語版 (English)

HONTO



AMAZON



法然上人讃仰会だから
こそ作れる
オリジナル単行本です。

法然上人讃仰会 FAX : 03-3578-7036

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4明照会館4階

※お問い合わせは、Fax またはメール

hounen@jodo.ne.jp へお願いします。